



これからの川づくりは、その川に必要な治水・利水や環境の保全を
考えて整備することはもちろんですが、流域の風土・歴史の特色を生
かした個性のある地域づくりをしていくことが求められています。

そのため流域の長い歴史のなかで、川と人(地域)がどのように関わ
り、その地域の風土・歴史がどのように熟成されてきたか知る必要があります。

河川整備計画を作るにあたって、肱川の風土・歴史を理解し、肱川の魅力や本来の姿
を知ることにより、個性ある肱川の川づくりに活かしていきます。

ニュースレターでは、肱川に関する歴史・風土をテーマ毎にお伝えしていく予定で
す。

かはんりん 肱川の流れを治めた先人の知恵 ～「河畔林」と「なげ」～

「河畔林」と肱川の流れ



◆肱川には、川に沿って竹藪やエノキ等の大木があり
肱川の流れや周囲の山並みと美しく調和しています。

この「河畔林」の中には、大洲藩が、肱川の治水対
策のため竹とエノキを混植した「御用藪」と呼ばれる
林があります。竹の根は土砂を噛んで蛇籠の役目を
し、その蛇籠をさらに大きくて深いエノキの根が根固
めするという方法で洪水から堤防を守ってきました。
また、洪水が堤防を乗り越えて溢れた時も、水の勢い
を和らげ、大きな流木やゴミの進入を防ぎ、田畑を流

出から守りました。しかも、竹藪がフィルター役目をして、細かい土砂(タル土)をと
おし肥沃な田畑としました。今でも「御用藪」にいくと、ビニール袋や流木等が引っかか
っており、今も変わらぬ効果を上げています。

◆国道56号が肱川を渡る肱川橋から上流を眺めてみ
ましょう。岸から川に向けて石を積み上げた構造物が
見えます。これが大洲藩が作った「なげ」です。

この「なげ」は、「河畔林」と同様、肱川の河岸を
洪水から守ってきました。また、肱川を行き来してい
た川舟の船着場でもあったということです。

かつては、肱川の川沿いに何カ所もあったとい
うことですが、今その姿を見ることができるのは8箇所
で、一番人目につくところにあるのが、
写真の「なげ」です。



今も残る渡場の「なげ」

「なげ」とは、?

水制の一種で水の勢いをやわらげたり、流れの向きを変
えることにより、川岸の弱い部分を保護したものです。

「蛇籠」とは、?

粗く編んだ円筒形の竹あるいは鉄線製の籠の中に栗石、
採石などを詰めたもので、河川の護岸工事で土砂の流出防
止、水流制御などに用いられ、その形状が大蛇の伏してい
る姿に似ているところからそういわれています。

洪水との長い闘いの歴史と先人の知恵は、このように
今でも肱川のいたるところでうかがい知れるのです。

一口メモ

御用藪

特に大洲藩は、竹を奨励して管
理させました。これにより治水はも
とより産業育成(竹細工)にも力をそ
そいだのです。

ところで、丸亀の団扇や和歌山の
和傘の骨に大洲産の竹が用いられて
いたことはご存じでしたか!